保育系短大生における施設実習に関する危険因子同定の試み

宮崎　隆穂・吉川　明守・宮越　敏夫・武田　誠一・李　　在憶

Is it possible to identify the risk factor of the experience as a trainee on an institute for social welfare among college students?

Takao Miyazaki, Akimori Yoshikawa, Toshio Miyakoshi,
Nobukazu Takeda, Lee Jaeuk

はじめに

施設実習とは、保育士資格取得の際に法律で義務付けられている実習のうち児童福祉法に定めるいずれかの児童福祉施設で行うものである。資格を得ようとする学生は、厚生労働省の基準により「保育実習」（必修）および「保育実習Ⅲ」（選択必修）を履修しなければならない。このうち「保育実習」（本学においては「保育実習Ⅰ」）のなかで、保育園とそれ以外の施設、「保育実習Ⅲ」で「保育実習」で行った施設以外での実習が課せられるのである[1)]。施設実習の意義に関しては、たんなる同情心からではなく、真のヒューマニズムに根差した、十分な援助技術を身につける[1)]という見解など多数挙げられているが、様々な現場における保育の実践を体験することにより、保育とは何か、療育とは何かということを相対的にとらえるきっかけになるということも考えられている。

宮崎らの先行研究[2)]では、保育実習の意義を客観的に測定する一つの手法として児童福祉施設に対する実習体験後のイメージ変化を取り上げ、SD法を参考にした測定をウェイティングリストコントロールデザインを用いて行った。その結果、実験群、ウェイティングコントロール群両方とも実習体験後に統計的に有意なイメージ変化（「施設に対するとっつきやすさ」因子、「温かさ」因子が双方ともポジティブな方向へ変化）が認められることが明らかになり、保育系短大生にとって施設実習の積極的な意義のひとつは児童福祉施設に対する偏見やネガティブなイメージの低減にあることが示された。

ただし平均をとってみると、確かに児童福祉施設に対するポジティブなイメージ変化が一般に認められたが、個別の実習体験者である学生の声を聞いてみると、少数ながら施設実習体験後にかえってネガティブなイメージを持つ者がいる。学生に対する実習指導の観点から考えると、こうした施設実習体験による不幸な経験の確率をできる限り減らすように配慮することは重要である。そこで本研究では、実習体験によるネガティブなイメージ変化をおこす学生はどの程度存在するのかを明らかにするとともに、与えられた条件と変数からこうしたネガティブなイメージ変化を予測する危険因子を同定できるかどうか試みることを目的とした。

方法

１．調査対象者

本学幼児教育学科２年生128人に質問紙調査を実施した。128人中保育士資格の取得を希望しているものは127人（99.9%）であるが、このうち３回のアンケート調査すべてに回答した102名を分析対象者（以下対象者）とした。

２．質問紙

質問項目は、学籍番号、氏名、性別、年齢など人口統計学的データを得る項目と、SD法を参考にした施設イメージを測定する形容詞対24項目を含むものから構成された[2)]。施設イメージを測定する形容詞対はたとえば（暗い―明るい）という対義語に相当するものが両極に並べられており、自分自身の持っている社会福祉施設に対するイメージに近い方を７件法にて評定してもらった。回答はすべて自己記述式で、繰り返し測定があるために記名方式をとった。

３．手続き

調査は、第一班が施設実習に行く直前の事前指導の時間に第一回目（X年５月）、第一班が施設実習から帰ってきた後の事後指導の時間に第二回目（X年６月）、第二班・三班が施設実習から帰ってきた後の事後指導の時間に第三回目（X年10月）を全員に対して合計三回回答してもらった。それぞれの質問紙の内容は同一である。調査研究の趣旨に関しては、事前に説明を行いインフォームドコンセントのとれた者に対して協力を依頼し、102名を対象者とした（協力、回収率80.3%）。それぞれの回答の所要時間は約15分であった。

４．統計処理

調査データは、データ分析ソフトSPSS12.0J for Windowsを用いて集計、分析された。

結果

１．調査対象の概要（ネガティブなイメージ変化を起こした学生の割合について）

対象者は、実習時期によって三班に分けられる。まず実習の事前指導として、５回の講義があり、最後の時間に第一回目の調査が行われる。その後第一班（53名）はX年５月12日～５月26日までの期間に２単位の施設実習を実施している。第一班が施設実習から帰ってきた後、６月に第二回目の調査が行われている。さらにその後第二班・第三班（49名）はそれぞれX年８月と９月に施設実習を実施している。第二班・第三班が実習を終わった後、第三回目の調査が行われている。性別の内訳は、男性11名（10.1%）、女性91名（89.9%）であった。

ネガティブなイメージ変化を引き起こした学生を特定するために、施設イメージの変化量を算出した。まず先行研究[2)]による因子分析結果をもとに、学生が持っている施設イメージを、「洗練されたあたたかさ」因子と「とっつきやすさ」因子と設定し、それぞれの因子得点を各測定時期ごとに算出した。次に10月の測定時期におけるそれぞれの施設イメージ因子得点から５月の測定時期における施設イメージ因子得点を引いたものを「施設実習後のイメージ変化量」とした。表１、図１はそれぞれ「施設実習後のイメージ変化量（洗練されたあたたかさ因子）」に関する度数分布表とヒストグラムである。図表よりｘ軸上右寄りに偏った分布であることが読み取れる。ネガティブなイメージ変化を引き起こした学生をここで「施設実習後のイメージ変化量」がマイナスであるものと定義すると、実習体験によってネガティブなイメージ変化を引き起こした学生の割合は、21.2%であることが分かった。次に表２、

図２で「施設実習後のイメージ変化量（とっつきやすさ因子）」に関する度数分布表とヒストグラムを示す。図表から、こちらも大きく右寄りに偏った分布であり、実習体験によってネガティブなイメージ変化を引きを越した学生の割合は、12.4％であることが分かった。

表１　施設実習後のイメージ変化量の度数分布（洗練されたあたたかさ因子）

		度数	パーセント	有効パーセント	累積パーセント
有効	－11.00	1	.8	1.0	1.0
	－8.00	1	.8	1.0	1.9
	－5.00	1	.8	1.0	2.9
	－4.00	2	1.6	1.9	4.8
	－3.00	5	3.9	4.8	9.6
	－2.00	4	3.1	3.8	13.5
	－1.00	8	6.3	7.7	21.2
	.00	16	12.5	15.4	36.5
	1.00	14	10.9	13.5	50.0
	2.00	20	15.6	19.2	69.2
	3.00	12	9.4	11.5	80.8
	4.00	9	7.0	8.7	89.4
	5.00	6	4.7	5.8	95.2
	7.00	1	.8	1.0	96.2
	8.00	3	2.3	2.9	99.0
	11.00	1	.8	1.0	100.0
	合計	104	81.3	100.0	
欠損値	システム欠損値	24	18.8		
合計		128	100.0		

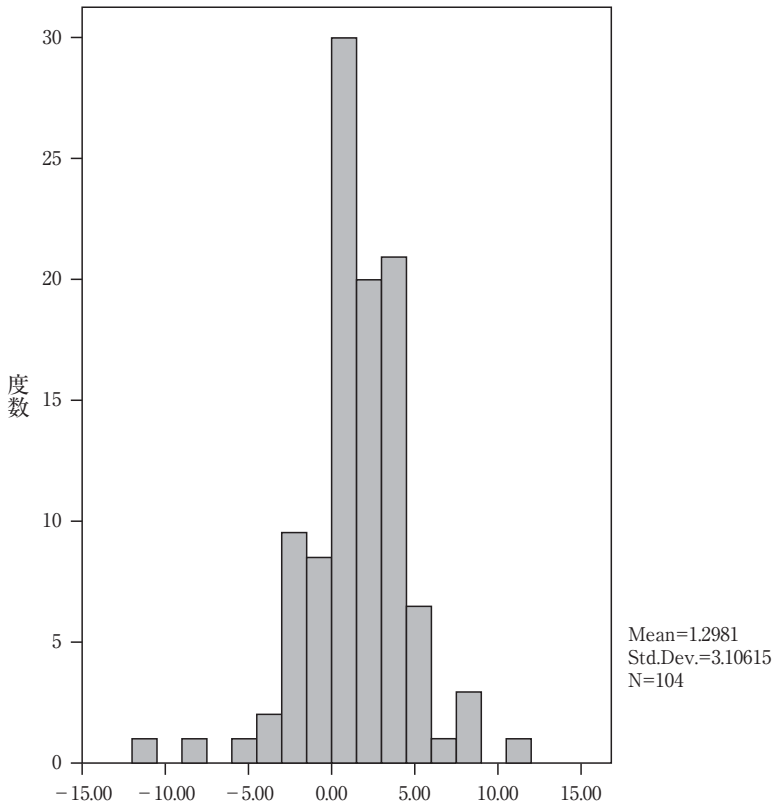

図１　施設実習後のイメージ変化量（洗練されたあたたかさ因子）

表２　施設実習後のイメージ変化量の度数分布（とっつきやすさ因子）

		度数	パーセント	有効パーセント	累積パーセント
有効	－4.00	3	2.3	2.9	2.9
	－3.00	4	3.1	3.8	6.7
	－2.00	4	3.1	3.8	10.5
	－1.00	2	1.6	1.9	12.4
	.00	7	5.5	6.7	19.0
	1.00	8	6.3	7.6	26.7
	2.00	14	10.9	13.3	40.0
	3.00	15	11.7	14.3	54.3
	4.00	9	7.0	8.6	62.9
	5.00	10	7.8	9.5	72.4
	6.00	8	6.3	7.6	80.0
	7.00	8	6.3	7.6	87.6
	8.00	5	3.9	4.8	92.4
	9.00	4	3.1	3.8	96.2
	10.00	1	.8	1.0	97.1
	13.00	2	1.6	1.9	99.0
	16.00	1	.8	1.0	100.0
	合計	105	82.0	100.0	
欠損値	システム欠損値	23	18.0		
合計		128	100.0		

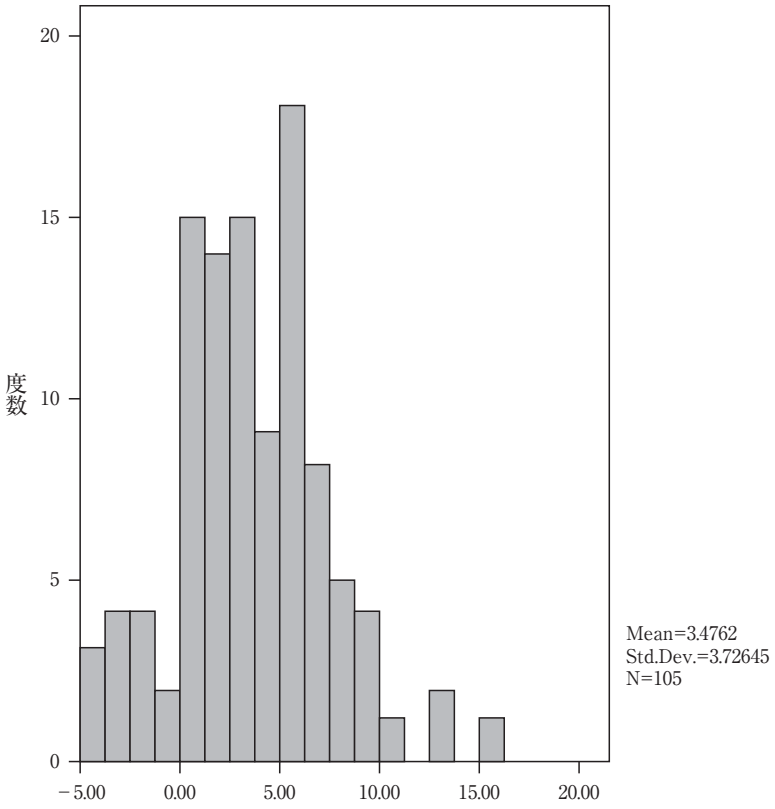

図２　施設実習後のイメージ変化量（とっつきやすさ因子）

２．ネガティブなイメージ変化を予測する危険因子の同定

ネガティブなイメージ変化を予測する危険因子を同定するために、従属変数を、施設実習後のイメージ変化量に、独立変数を与えられたデータセットに存在するパラメーターとしたロジスティック回帰分析を行った。まず従属変数は、それぞれの施設実習後のイメージ変化量の変数からポジティブな変化があった群（０以上の正の変化）とネガティブな変化（負の変化）があった群の２値に設定し、順序を持つカテゴリー変数とした。次に独立変数は与えられたデータセットに存在する危険因子となりうる変数、すなわち「性別」「実習直前の不安度」「ボランティア経験の有無」「実習時期」の４変数を投入した。「性別」「ボランティア経験の有無」はそれぞれ２値を取るカテゴリー変数、「実習時期」に関しては、５月の実習時期と８月９月の実習時期の２値を取るカテゴリー変数とした。「実習直前の不安度」に関しては５月の測定時期に、施設実習に対する不安度を０から100まで10段階で評定してもらった。近似的なVisual Analogue Scale（VAS）としてこの変数を設定した。実際のロジスティック回帰分析は、投入された４つの独立変数同士の相関関係を調整しつつ、それぞれの独立変数の組み合わせによってどの程度ネガティブなイメージ変化を予測できるか検討するため、強制投入法によって行われた。表３は洗練されたあたたかさ因子得点変化量を従属変数とした場合のロジスティック回帰分析結果である。回帰式全体のモデルの当てはまりを検討するオムニバス検定ではχ^2=2.781（p=0.595）と統計的に有意ではなく、近似的にモデルの情報量を表現するCox&Snell　R^2=0.027（１に近いほど予測精度が高く必要な情報量が多いとされる）と非常に低いものにとどまった。表３より従属変数の単位増加量に対する各独立変数のオッズ比Exp（B）の値も大きなオッズ比をもったものは少なく、統計的にも有意ではなくモデルに含めるのが妥当ではないという結果であった。

表３　ロジスティック回帰分析結果（洗練されたあたたかさ因子得点変化量を従属変数とした場合）

		B	標準誤差	Wald	自由度	有意確率	Exp（B）
ステップ１[a]	性別(1)	－.326	.677	.232	1	.630	.722
	ボランティア有無	.255	.437	.340	1	.560	1.290
	実習予定月R(1)	－.362	.436	.687	1	.407	.697
	不安度	.012	.010	1.569	1	.210	1.012
	定数	－.045	.955	.002	1	.962	.956

a. ステップ１：投入された変数　性別、ボランティア有無、実習予定月R、不安度

表４はとっつきやすさ因子得点変化量を従属変数とした場合のロジスティック回帰分析結果である。回帰式全体のモデルの当てはまりを検討するオムニバス検定ではχ^2=2.723　（p=0.605）と統計的に有意ではなく、近似的にモデルの情報量を表現するCox&Snell　R^2=0.026（１に近いほど予測精度が高く必要な情報量が多いとされる）と非常に低いものにとどまった。表４より従属変数の単位増加量に対する各独立変数のオッズ比Exp（B）の値も大きなオッズ比をもったものは少なく、統計的にも有意ではなくモデルに含めるのが妥当ではないという結果であった。

表４　ロジスティック回帰分析結果（とっつきやすさ因子得点変化量を従属変数とした場合）

		B	標準誤差	Wald	自由度	有意確率	Exp（B）
ステップ１[a]	性別(1)	－.455	.867	.275	1	.600	.635
	ボランティア有無	－.675	.553	1.489	1	.222	.509
	不安度	.008	.011	.500	1	.479	1.008
	実習予定月R(1)	－.614	.542	1.282	1	.258	.541
	定数	1.968	1.194	2.719	1	.099	7.159

a. ステップ１：投入された変数　性別、ボランティア有無、不安度、実習予定月R

考察

結果より施設実習体験によって、かえってネガティブなイメージを持つ学生の割合は、「洗練されたあたたかさ」因子では２割、「とっつきやすさ」因子では１割程度であることが明らかになった。全体の施設実習体験者から見れば少数に属するとはいえ、本学幼児教育学科の場合で考えると130人中13名から26名程度の学生は施設実習によって本来の目的とは反対に児童福祉施設に対するネガティブなイメージを抱いてしまった可能性が示唆された。今後毎年の実習においても同様の割合でこうした学生が出現することを仮定すれば、施設実習において例年10名から20名程度の潜在的なリスクを抱えた学生が存在するということになる。こうした学生に対して事前指導（つまり実習指導に出す前の段階）の段階で、効率よくリスクを抱えた学生をスクリーニングし、何らかの介入を行うことが実習指導において重要である。

しかしながら本研究で行われた結果からは、すくなくとも今回与えられた条件、変数だけをつかっていては、効率のよいスクリーニングが難しいことが示された。すなわち、ロジスティック回帰分析の結果から、性別、ボランティア経験の有無、実習前の不安度、実習時期などの独立変数からは、いずれの因子得点のイメージ変化量も予測することは難しいということが明らかになった。むしろ追加的に行われたクロス集計表による分析結果からは、直前の不安度が極端に高いグループのほうが、ポジティブなイメージ変化の割合が高いことがわかり、一筋縄では解釈できない様子がうかがえる。もちろん今回投入された変数だけではなく、性格特性、保育者適性についての自己効力感など有効なスクリーニングに寄与しそうな個人差変数はいくつか考えられるが、こうした測定を行うことのコストと得られる結果の重要性については慎重にそのバランスを見極める必要があると思われる。むしろ今後の実習指導の中で少数のネガティブなイメージ変化を経験している者に対して、質的研究法を参考に、なぜ実習がうまくいかなかったのか、なぜネガティブなイメージ変化があったのかについてのナラティブを一つ一つ丁寧に聞き取っていく方向性がより効率的であるとも考えられる。そうした個別の事例について丁寧に追っていく中で、スクリーニングに寄与するキーワードや概念を追っていくことが今後の課題である。また、そうした危険因子が明らかになれば、施設実習によるリスクを未然に回避する介入法の検討することができ、その先の重要な課題となる。

引用文献

１）教育・保育実習を考える会　編、新版　施設実習の常識　「福祉を実践するための66項」、蒼丘書林、1998、30ページ

２）宮崎隆穂、吉川明守、宮越敏夫　「保育系短大生における施設実習後の施設イメージの変化」、新潟青陵大学短期大学部研究報告38、2008、59-68ページ